

司書のおすすめ



『J・J・J三姉弟の世にも平凡な超能力』

チョン・セラン／著 古川 綾子／訳 亜紀書房 929.1 冊

タイトルのJJJは、長女ジェイン、弟ジェウク、年の離れた高校生の末っ子ジェフンの三姉弟の名前の頭文字です。母親と共にソウルで暮らす彼らは、ある日海へバカンスに出掛けます。ところがその後、3人それぞれの身に異変が起こると共に、「Save」と書かれたメッセージカードと小包が届きます。

普段は特別仲が良いというわけでないごくごく普通の姉弟ですが、ここぞという時には誰かのため家族のために全力で立ち向かい活躍します。ちょっぴり不思議でくすっと笑える温かい物語です。

『科学がつきとめた疑似科学』 山本 輝太郎、石川 幹人／著 エクスナレッジ 404 冊

「疑似科学」とは、科学的であるかのように見えるが実は科学的とはいえない主張や情報のことです。本書は、「これって本当?」「あれってどういうこと?」と日常で疑問に思うことを取り上げて解説しています。科学とは何かという基本的なことをはじめ、ブルーライトカット、機能性表示食品、確証バイアス、性格診断、漢方など具体的な事柄を交えつつ、「疑似科学」に惑わされないためにはどうすればいいか、イラスト付きで分かりやすく書かれています。科学に詳しくない人でもとっつきやすく気軽に読める1冊です。



『書いてみた生活史 学生とつくる民俗学』 菊地 暁／編著 実生社 361.9 冊



関西の3大学で民俗学を教えてきた編著者は、毎年学生に同じ課題を出しています。それは、「受講生の祖父母を話者（語り手）として生活史を聞き書きする」、平たく言えば「おじさん／おばあさんの伝記を書く」というもの。力作ぞろいのレポートの読者が自分だけではもったいない、ということで編まれた本書には、累計およそ5000本の中から特に読みどころのある12本のレポートが掲載されています。大きな歴史の流れの中に生きるひとりひとりの個としての人生が、話者と聞き手の対話を通して浮かび上がってきます。

『本を出そう、本を出そう、出したらどうなった?』

城村 典子／著 みらいパブリッシング 021.3 冊

本を書いてみたいと思っている、又は思ったことがある方、いらっしゃるのではないのでしょうか。そんな方々の背中を押すように、「本を出すことは、自分だけのためではなく、社会に役立つことだからぜひ行動に移してください」と著者は伝えています。

実際にはどんなことから始めたらいいのか、編集者とはどのようにつきあえばいいのか等、現役編集者ならではのアドバイスのほか、出版業界についても詳しく説明されています。

本について、新たに知る一面があるかもしれません。

